

よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



23

よろこびの知らせ
第 23 集

目 次

恐れるな 1
黙示録 1:12-18

人生の勝利者 10
黙示録 2:1-7

小羊の歌 19
黙示録 5:9-14

主が共に 28
黙示録 21:1-4

ここに収められたメッセージは、2021 年 8 月にテキサス州
プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたも
のです。聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

恐れるな 黙示録 1:12-18

1:12 そこで私は、私に語りかける声を見ようとして振り向いた。
振り向くと、七つの金の燭台が見えた。
1:13 それらの燭台の真中には、足までたれた衣を着て、胸に金の
帯を締めた、人の子のような方が見えた。
1:14 その頭と髪の毛は、白い羊毛のように、また雪のように白
く、その目は、燃える炎のようであった。
1:15 その足は、炉で精練されて光り輝くしんちゅうのようであり、
その声は大水の音のようであった。
1:16 また、右手に七つの星を持ち、口からは鋭い両刃の剣が出て
おり、顔は強く照り輝く太陽のようであった。
1:17 それで私は、この方を見たとき、その足もとに倒れて死者の
ようになった。しかし彼は右手を私の上に置いてこう言われた。
「恐れるな。わたしは、最初であり、最後であり、
1:18 生きている者である。わたしは死んだが、見よ、いつまでも
生きている。また、死とハデスとのかぎを持っている。

一、キリストの栄光

イエスの姿を描いた絵はたくさんあります。一番古いのは、ローマの地下墓所のものでしょう。ローマのキリスト者たちは迫害を逃れて地下墓所で礼拝を守ったのですが、その壁に聖書の物語を描いたものが今も残っています。一番有名なのは、イエスを羊飼いとして描いた絵でしょう。ギリシャの諸教会では「イコン」にイエスを描きました。アメリカではドイツの画家ハインリヒ・ホフマンが描いたものが有名で、「神殿でのキリスト」「キリストと富める若人」「ゲツセマネのキリスト」な

どの作品があります。

これらはそれぞれが想像力を働かせて描いたもので、聖書にはイエスの背丈がどれほどであったか、どんな髪型をしていたか、目や口がどうであったか、何インチのサンダルが足にぴったりだったかなど、イエスの身体的な特徴は何一つ書かれていません。私たちにとって大切なのはイエスの外見よりも内面だからです。しかし、ただひとつイエス・キリストの姿を具体的に描いた箇所があります。それが黙示録 1:13-16 です。

13 節には「足までたれた衣を着て、胸に金の帯を締めた、人の子のような方」とあります。この「人の子のような方」とは、ダニエル 7:13 に「私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた」とある「人の子」で、それは栄光のうちにおられる神の御子を指します。

黙示録に描かれているキリストの姿は、ダニエル 10:5-6 に書かれているものと、とてもよく似ています。そこには、こう書かれています。「私が目を上げて、見ると、そこに、ひとりの人がいて、亜麻布の衣を着、腰にはウファズの金の帯を締めていた。そのからだは緑柱石のようであり、その顔はいなずまのようであり、その目は燃えるたいまつのものであった。また、その腕と足は、みがきあげた青銅のようで、そのことばの声は群集の声のようであった。」ダニエルに示されたのは人となって世に来られる前のキリストの姿です。それから 630 年後、キ

リストは、再び同じ姿でヨハネに現われてくださったのです。

足までたれた衣や金の帯は神の御子がどんなに高く貴いお方であるかを表しています。14 節に「その頭と髪の毛は、白い羊毛のように、また雪のように白く…」と言われているのは、キリストの聖さとともに、キリストが永遠のお方であることを言っています。「その目は、燃える炎のよう…」というのは、主がすべてのものを見通しておられることを意味しています。15 節にある「炉で精練されて光り輝くしんちゅうのような足」とは、キリストがすべての敵をその足の下に踏み碎かれることを言っています。

「その声は大水の音のよう…」とは、神の言葉の力強さを意味しています。この神の言葉は 16 節で「両刃の剣」と言われています。ヘブル 4:12 に「神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髓の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます」とあるように、神の言葉が「両刃の剣」と言われているのは、その鋭さを強調しています。神の言葉は人の心の奥深くにあるものさえ見通します。神の目に隠れているものなど何ひとつないのです。当時、ローマ兵が腰につけていた短剣は両刃の剣で、ヘブル人への手紙は神の言葉をそれにたとえたのですが、現代では、外科医が使うサージカルナイフにたとえることができるでしょう。外科医がそれを使うのは患者のからだから悪いものを取り

除き、患者を健康にするためです。同じようにキリストは、最高の外科医として、そのお言葉で私たちのたましいを聖め、癒やしてくださるのです。

キリストの「顔」は「強く照り輝く太陽のようであった」と言われています。イエスが変貌の山で栄光の姿に変わったとき、その「御顔は太陽のように輝き…」（マタイ 17:2）しました。これはキリストの栄光を表します。そして、キリストを信じる私たちも、キリストの栄光にあずかり、「主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて」いくのです（コリント第二 3:18）。きれいな顔立ちをしていても表情の暗い人がいます。しかし、キリストの御顔を仰いで生活している人は、その心がキリストの光で照らされ、表情までも明るくなります。

二、キリストの恵み

このようなキリストの栄光の姿を見たとき、ヨハネはその足もとに倒れて死人のようになりました。使徒ヨハネは自分のことを「主が愛された弟子」（ヨハネ 21:20）と呼んだほど、キリストに愛され、キリストを愛した人だったのに、イエスの栄光の姿に圧倒され、死ぬばかりになりました。

同じようなことはイザヤが神の幻を見たときにも起こりました。そのときイザヤは「ああ、私は滅んでしまう」（イザヤ 6:5 新改訳 2017）と叫ばずにはおれませんでした。ペテロも同じでした。ガリラヤ湖で一晩中漁をしても一匹も魚がとれなかった日に、イエスはペテロに沖

に漕ぎ出させ、そこで網を下ろすように言いました。それは魚が漁れるはずがない時間であり、場所でした。ところがイエスの言葉に従ったとき、網が破れそうになるほどの魚がとれました。そのとき、ペテロはイエスの足もとにひれ伏して、「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから」（ルカ 5:8）と言いました。罪ある者は聖なるお方の前に立つことができず、造られた者は造り主の前にひれ伏すことしかできないのです。

しかし、神がイザヤをきよめたように、イエスもペテロに「こわがらなくてもよい。これから後、あなたは人間をとるようになるのです」と言われました。黙示録でも、栄光の姿のキリストはヨハネに「恐れるな」と語りかけられました。

「恐れるな。」イエスは何度、弟子たちにこの言葉を語られたことでしょう。ヨハネの福音書に弟子たちの乗った船が、ガリラヤ湖で強風にあおられたときのこと書かれています。そのとき、イエスはガリラヤ湖の荒れる波の上を歩いて弟子たちの船に近づいてこられました。弟子たちはそれを見て恐れしました。しかし、イエスは弟子たちに言われました。「わたしだ。恐れることはない。」それで、弟子たちは、イエスを喜んで船に迎えました。すると強風が止み、船は無事に岸に着きました（ヨハネ 6:16-21）。ヨハネもその船に乗っていたので、自分で体験したことを書いたのですが、ヨハネは、栄光の姿のイエスが「恐れるな」と語りかけてくださったと

き、ガリラヤ湖での出来事とそのときに聞いたイエスの言葉を思い起こしたことでしょう。「恐れるな。」ヨハネはこの言葉を聞いて、ガリラヤやユダヤで、常に弟子たちをかばい、助け、導いてくださったイエスの優しさを思い起こしたことでしょう。

イエスの栄光の光、それは、闇の中に留まっていたと思う人には恐ろしいものかもしれませんが、光のうちに歩みたいと願う者には、たましいから闇を取り払う恵みの光です。エペソ 5:8 に「あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい」とある通りです。キリストの栄光の光は人を温める恵みの光でもあるのです。「恐れるな。」恐れや不安を感じることの多い時代に生きている私たちですが、この言葉に励まされて、キリストの光のうちに歩みたいと思います。

三、キリストの主権

しかし、イエスが「恐れるな」と言われたからといって、イエスが本来は恐るべきお方であることを忘れてはなりません。イエスが偉大なお方であることは、誰もが認めることですが、現代は、その偉大さを人間のレベルに落としています。ブルース・バートンは 1925 年に「誰も知らない男」("The Man Nobody Knows") という本を書きました。彼は、その本で、大衆の心理を的確に掴み、人々に語りかける言葉を持ち、わずか 12 人の弟子たちから、その後、今に至るまで続いているグローバル・エンタープライズを始めた天才的なビジネスマンとして

イエスを描きました。そのような話は、確かにビジネス・ピープルの興味を惹くでしょう。しかし、そのようなイエスは、人を救わないのです。人に本当の人生の「成功」、最終的な「勝利」の人生を与えないのです。

最近、キリスト者の間でイエスを「お友だち」扱いする傾向が見られるようになりました。確かにイエスは弟子たちを「友」と呼びました。そしてその「友」のために命を捨ててくださいました。だからといってイエスが弟子たちと同等であるということではありません。イエスが弟子たちを「友」と呼ばれたのは、じつに、「神の謙遜」です。人間の謙遜といったレベルのものではありません。神の御子のへりくだりで、それは人間の考えを超えています。ピリピ 2:9-11 にこうあります。「キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。」この箇所は、初代教会の礼拝でキリストへの信仰告白として唱えられたものです。続いてこう言われています。「それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、『イエス・キリストは主である』と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」

「イエス・キリストは主である。」それは、イエスがすべてのものの主権者であることを認め、受け入れることです。イエスを私の人生の主とし、このお方に従うことです。「私の主は私ではない、イエスである。」この真理に立つことです。そこから離れてしまうことがあっても、絶えずそこに立ち返って歩むこと、それが「イエス・キリストは主である」と告白することです。これが聖書が教える信仰です。この信仰が人を救います。初代の弟子たちは、この信仰によって迫害を乗り越えることができたのです。

イエスは「恐れるな」と語りかけた後、こう言われました。「わたしは、最初であり、最後であり、生きている者である。わたしは死んだが、見よ、いつまでも生きている。また、死とハデスとのかぎを持っている。」

「最初であり最後である」というのは、イエスが「永遠の神」であること、「わたしは生きている」というのは、「生ける神」であることを言っています。「わたしは死んだが、見よ、いつまでも生きている」というのは、イエスの十字架と復活をさしています。「死とハデスのかぎを持っている」というのは、イエスが、生きている者の世界だけでなく、死んだ者の世界さえも支配しておられるお方、生と死の両方に権威を持っておられることを意味しています。イエスがヨハネに、また、迫害の中にあったキリスト者に「恐れるな」と言われたのは、「わたしが主である。わたしに信頼するなら、何者をも、死さえも恐れることはない」という意味だったの

です。

当時のキリスト者たちは、ローマ皇帝を「主」とし崇めなかったということで、迫害されました。キリスト者はローマの法律に従いました。しかし、人間を「神」とし、「主」とすることはできませんでした。イエス・キリストだけがただひとりの主だからです。「皇帝崇拜」を拒否したため迫害を受けましたが、その迫害に耐えさせたのは、イエス・キリストを「主」とする信仰であったのです。

幸いなことに、今日、アメリカにいる私たちは、初代のキリスト者のような迫害に遭うことはありません。しかし何の苦しみもないわけではありません。苦しみの種類は違っても、どんな問題や課題の中でも、「イエス・キリストは主である」ことを忘れてはならないと思います。「イエスさま、あなたは、このことにおいても主です」と申し上げます。イエスは私たちに恐れにかえて平安と喜びを、勇気と励ましを与えてくださいます。「恐れるな」との声を聞いて前進したいと思います。

（祈り）

父なる神さま、私たちに御子イエスを「主」として与えてくださりありがとうございます。「恐れるな」と語りかけ、私たちに近づいてくださるお方に、私たちも近づきます。私たちの日々の生活の中で、主であるお方にさらに信頼する者としてください。主イエス・キリストのお名前です。

人生の勝利者 黙示録 2:1-7

2:1 エペソにある教会の御使いに書き送れ。『右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方が言われる。

2:2 「わたしは、あなたの行ないとあなたの労苦と忍耐を知っている。また、あなたが、悪い者たちをがまんすることができず、使徒と自称しているが実はそうでない者たちをためして、その偽りを見抜いたことも知っている。

2:3 あなたはよく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び、疲れたことがなかった。

2:4 しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。

2:5 それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをなささい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。

2:6 しかし、あなたにはこのことがある。あなたはニコライ派の人々の行ないを憎んでいる。わたしもそれを憎んでいる。

2:7 耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者に、わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせよう。』』

「ヨハネの黙示録」は 95 年ころ、パトモス島で書かれました。それは、ローマの皇帝ドミティアヌスの晩年、アジア州で迫害が起こったときでした。パトモス島には鉾山があり、キリスト者たちはそこで強制労働をさせられていました。そのころエペソの教会にいた使徒ヨハネも、ずいぶん高齢でしたが、パトモス島に「島流し」にされました。

しかし、ヨハネがパトモス島に連れてこられたのは、

パトモス島のキリスト者にとって益となりました。1:10に「私は、主の日に御霊に感じ…」とあるように、「主の日」、つまり、日曜日にヨハネの導きによってパトモス島でも礼拝が守られるようになったからです。その礼拝によって、パトモス島のキリスト者が力づけられただけでなく、主の日ごとにヨハネに臨んだ神の言葉は書物に記録され、アジア州の諸教会を励ますものとなったからです。ヨハネの書いたものはエペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィア、ラオデキヤの教会に送られました。これらの町を地図で見ると、順番に並んでいることが分かります。最初にエペソに送られたものは、そこで朗読され、次にスミルナへ、その次はペルガモへと順々に回覧され、それぞれの教会で写しが作られ、それがさらに他の教会へと広がっていき、「ヨハネの黙示録」は新約聖書の最後の書物となったのです。今も、多くの人々にとって、この書物は慰めとなり、希望をなっています。神はパトモス島にヨハネを送り、そこのキリスト者を励ますだけでなく、アジアの諸教会とその信徒、さらに、現代に至るまでのすべての教会とキリスト者を励まし続けてくださっているのです。まさに、神は「万事を益」としてくださるお方です。

一、神の約束

きょうは、7節だけに注目します。「勝利を得る者に、わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の實をたべさせよう。」これはエペソの教会へのメッセージの最後に

書かれている言葉ですが、エペソの教会だけではなく、残りの六つの教会すべての教会へのメッセージに「勝利を得る者」という言葉があり、約束の言葉が続いています。

「勝利を得る者に、わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の実をたべさせよう。」この約束は 22:1-2 にその成就があります。「御使いはまた、私に水晶のように光るいのちの水の川を見せた。それは神と小羊との御座から出て、都の大通りの中央を流れていた。川の両岸には、いのちの木があつて、十二種の実がなり、毎月、実ができた。また、その木の葉は諸国の民をいやした。」これは、明らかに創世記のエデンの園と関連しています。エデンにも川があり、園を潤していました。そして、園の中央には「いのちの木」がありました（創世記 2:8-10）。神はこの地球を人の住処として造り、そこに最初の人、アダムとエバをエデンの園という理想的な場所に置いてくださいました。ところが、アダムとエバは神の言葉に不従順であつたため、エデンの園を追われ、「いのちの木」から遠ざけられました。

けれども神は人類をお見捨てになりませんでした。人々が神に立ち返り、神の言葉に従順な者となり、生ける神との生きた交わりという「いのちの木」の祝福を取り戻す道を備えてくださいました。それが、イエス・キリストの十字架と復活です。罪のない神の御子が十字架という「呪いの木」にかけられました。イエスが私たちに代わって、私たちの罪と罪の結果のすべてを引き受

け、ご自分の身に背負ってくださったのです。イエスはそれによって「呪いの木」である十字架を「祝福の木」にしてくださいました。十字架は私たちにとってまさに「いのちの木」です。イエスは復活によって、今、私たちにその「いのち」を与えてくださっています。イエス・キリストを信じる者は、その内側に「エデンの園」を持っているのです。

キリストによって「成就」した神の約束は、同じくキリストによって「完成」します。聖書は救いを三つの時制で教えています。イエス・キリストを信じる者は、すでに救われ、今救われ続け、やがて救われるのです。イエス・キリストを信じたとき、私たちは罪の刑罰から救われました。今、罪の力から救われています。そして、やがて罪の存在からも救われます。キリストが再び来られるとき、創世記の天地創造よりもさらに大きな天地の再創造が行なわれます。すべてが改まり、かつてのエデンの園よりも、もっと素晴らしい天のエルサレムが現れるのです。今、信仰によって体験している「いのちの木の实」、私たちを生かす「永遠のいのち」が、目に見える形で実現するのです。福音書は神の約束の「成就」を告げ、黙示録は神の約束の「成就の成就」、つまり、「完成」を告げています。そして聖書の全体は、神が「約束の神」であり、約束を守られる真実なお方であることを語っています。

二、靈的戦い

しかし、救いの成就から完成までの間は決して平坦で

はありません。そこには、靈的・信仰的な戦いがあります。ヨハネの黙示録には戦争のモチーフが数多く使われています。世の終わりには、戦争や内乱があり、ききんや地震が起こることはイエスご自身が預言しておられました。しかし、それらは「予兆」や「前兆」にすぎません（マタイ 24:6-8）。ほんとうの世の終わりのしるしは、戦争や災害ではなく、もっと靈的・信仰的なものです。黙示録で「獣」と呼ばれている「反キリスト」が現われ、キリストに従う者たちを苦しめることです。信仰者が苦しめられることは、いつの時代にもありましたし、今もあります。初代教会は、およそ300年にわたって苦しめられました。黙示録に描かれている「獣」は、キリスト者を迫害したローマ皇帝の姿を借りて描写されています。私たちが聖書から知ることは、かつてあった迫害と弾圧が世界的、地球的な規模で起こるということです。そこで繰り広げられる戦いは、軍事的な戦争や経済戦争ではありません。キリストへの信仰に敵対する力と、キリストへの信仰を守ろうとする人々との靈的・信仰的な戦いです。

信仰者たちは、そうした悪の力との戦いに召集された「キリストの兵士」です。黙示録7章にイスラエル十二部族の各部族からそれぞれ一万二千人が選ばれたことが書かれています。これは、民数記にあるように、エジプトから脱出したイスラエルの民が、成人男性の数を数え、兵士たちを選び出したことに基づく表現です。神がかつてイスラエルを「主の軍勢」として整えたように、新約

時代の神の民、キリスト者も、「主の軍勢」なのです。

この人たちの額に「印」がつけられました。これは神の選びや保護を表していますが、同時に、人々の神への忠誠をも意味しています。申命記 6:4-5 に「聞きなさい。イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」とあります。これは、最初の言葉「聞きなさい」のヘブライ語から「シェマー」と呼ばれ、神の民にとって一番大切な戒めです。申命記 6:8 に「これをするしとしてあなたの手に結びつけ、記章として額の上に置きなさい」とあるのですが、イスラエルの人々はこれを文字通りに受け取りました。「シェマー」を書いた羊皮紙をテフィリンと呼ばれる小さな箱に入れ、実際に額の上に置いて、「私は、心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、私の神、主を愛します」と祈ったのです。ですから、黙示録にある額の「印」は「シェマー」に表された、唯一のまことの神への信仰と忠誠を表すものであるとすることができます。

ところが、反キリストも、人々の額に「獣の印」を刻みます。それは神の「印」のように人々を守るものではなく、人々を支配しようとするものです（13:16-17）。現代の技術では、人間の体内にマイクロチップを埋め込んでその人をコントロールすることも不可能ではありませんが、聖書が言う「獣の印」とは、「神の印」に対抗するもので、神を否定する思想や誤った教えを人々に吹き込み、マインドコントロールによって、人々から神への

信仰や忠誠をとりのぞくことを意味していると思われる
す。

パンデミックになって私たちの生活は大きく変化しました。それで、今までの価値観を「キャンセル」し、社会の仕組みを「リセット」しなければならないということが主張されるようになりました。しかし、そこで言う「リセット」や「キャンセル」は聖書が教える価値観を「キャンセル」し、神が定めてくださった秩序を「リセット」して、ごく少数の人が大多数の人を管理するような社会を作ろうとすることで、そこで攻撃されているのは、つきつめていくと、まことの神への信仰と忠誠なのです。ですから、私たちは、神の言葉を今まで以上に、しっかりと握りしめ（ピリピ 2:16）、心に豊かに住まわせ（コロサイ 3:16）、それを実行する（ヤコブ 1:22）ことに励み、それによって、「獣の印」に勝たなければなりません。

初代教会のキリスト者は、ローマ政府がどんなに自分たちを苦しめても、決して反乱を起こしたり、戦争をしたりしませんでした。自らの信仰を守り、まわりの人々に、言葉と行いをもって忍耐深くキリストを証しました。それが、「霊の戦い」です。「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するもの」なのです（エペソ 6:12）。

三、人生の勝利

世界は終わりに向かって進んでおり、黙示録にあるよ

うな「反キリスト」がいつ出現してもおかしくない時代となりました。世界中で信仰が試みられ、妥協を強要され、そして否定されようとしています。今こそ、私たちは、聖書が教える霊的・信仰的な戦いを意識しなければなりません。けれども、それは、日常のことをおろそかにしてよいということではありません。テサロニケ人への手紙第一と第二は、再臨について教えている手紙ですが、その中でパウロは「落ち着いた生活をすることを志し、自分の仕事に身を入れ、自分の手で働きなさい」（テサロニケ第一 4:11）と教え、「あらゆる良いわざとことばとに進むよう、あなたがたの心を慰め、強めてくださいますように」（テサロニケ第二 2:16-17）と祈っています。人生とは、一日、一日、また一年、一年の積み重ねです。きょう一日をどう生きるかが、その人の人生を決め、さらに永遠の運命を決めると言ってもよいでしょう。

スティーヴン・コヴィーは、『7つの習慣』で、人生を成功に導くものは、人に自分を良く見せようとするテクニックなどではなく、「誠意・謙虚・誠実・勇気・忍耐・勤勉・質素・節制」などの人格的なものであると言っています。そしてそのために「終わりを思い描くことから始める」ことを勧めています。自分のお葬式のとときに、人々からどう言われたいのかを考えなさいということです。この事は、信仰者にも当てはまります。自分が主にあってどのような人間になりたいのか、主のためにどのようなことをしたいのかを考えてみましょう。世を

去って、主の前に出るとき、主からどんな言葉をいただきたいのかを思い出しましょう。

黙示録はこう言っています。「この者どもは小羊と戦いますが、小羊は彼らに打ち勝ちます。なぜならば、小羊は主の主、王の王だからです。また彼とともにいる者たちは、召された者、選ばれた者、忠実な者だからです。」(17:14) イエス・キリストはあらゆるものに打ち勝たれた勝利の主です。キリストは罪に勝ち、死に勝ち、世に勝ち、サタンに勝利しておられます。私たちの勝利は、この勝利の主からいただく勝利です。主イエスの約束はつねに真実です。私たちも主イエスに忠実であるなら、「勝利を得る者」となり、神から約束のものを受けることができるのです。「世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。」(ヨハネ第一 5:5) 人生の勝利、それは、何か特別なことができた人や数多くのことをした人だけに与えられるものではありません。神の言葉に忠実であり、信仰を守り通したすべての人に、キリストが与えてくださるものなのです。

(祈り)

父なる神さま、あなたは、イエス・キリストを信じる者を「勝利する者」としてくださいました。やがて、主イエスの勝利にあずかるその日を思い見て、今の日々を御言葉に忠実に生きることができるよう、助け導いてください。あなたの約束と真実を感謝し、イエス・キリストのお名前です。

小羊の歌

黙示録 5:9-14

5:9 彼らは、新しい歌を歌って言った。「あなたは、巻き物を受け取って、その封印を解くのにふさわしい方です。あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い、

5:10 私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。」

5:11 また私は見た。私は、御座と生き物と長老たちとの回りに、多くの御使いたちの声を聞いた。その数は万の幾万倍、千の幾千倍であった。

5:12 彼らは大声で言った。「ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。」

5:13 また私は、天と地と、地の下と、海の上のあらゆる造られたもの、およびその中にある生き物がこう言うのを聞いた。「御座にすわる方と、小羊とに、賛美と誉れと栄光と力が永遠にあるように。」

5:14 また、四つの生き物はアーメンと言い、長老たちはひれ伏して拝んだ。

一、天の礼拝（4章）

イエス・キリストはヨハネに「そこで、あなたの見た事、今ある事、この後に起こる事を書きしるせ」（1:16）と言われました。このように、ヨハネの黙示録には「今ある事」と「この後起こる事」の二つが書かれています。ここで「今ある事」とはローマ皇帝ドミティアヌスがアジア州の教会を迫害した時のことです。迫害の下で、キリスト者たちは、誰しも、「この迫害はいつまで

続くのだろう。これから教会はどうなっていくのだろう。世界はどこに向かっていくのだろう」と考えたことでしょう。それで、キリストは「今ある事」だけでなく、「この後起こる事」をもいくつもの幻によって示されました。その幻の一つが4章にある「天の礼拝」です。

ヨハネは「ここに上れ。この後、必ず起こる事をあなたに示そう」（4:1）との声を聞いて、天に引き上げられました。今起こっている迫害の意味を知り、それがこれからどうなっていくのかについて、神のみこころを知るためには、ヨハネは天に場所を移し、そこからものごとを見る必要がありました。神の御座から世界を見る、神の観点でものごとを考えるとということです。

私たちは、このときのヨハネのように迫害には遭ってはいませんが、終息のきざしの見えないパンデミックと、それに関連した様々な問題に直面しています。政治や経済、社会や家庭、からだの健康と心の健康などに、かつてなかったような影響が押し寄せてきています。私たちも、なぜこんなことが起こり、それがいつまで続くのだろうという思い煩ってしまいます。しかし、人間の知恵だけでさまざまに考えても、私たちには、明日のことどころか一歩先のことも分からないのです。そんな時、私たちが行くべきところは、やはり、「昔いまし、常にいまし、後に来られる方」、つまり、過去も、現在も、未来も、すべてを知っておられる神のみもとです。

さて、天には御座があり、その御座近くには四つの生き物がいました。それらはそれぞれ異なった顔を持って

いましたが、これは神が作られた野生の動物、家畜、人間、そして空の鳥といった被造物のそれぞれの世界を代表しています。顔は違っていますが、姿は同じで、六つの翼を持っています。これはイザヤ書で「セラフィム」（イザヤ 6:1-2）、エゼキエル書で「ケルビム」（エゼキエル 10:1）と呼ばれているのと同じ姿です。四つの生き物は神の側近くに仕える特別な天使だと思われます。彼らは「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔いまし、常にいまし、後に来られる方」（4:8）と、御座におられる方を絶えず賛美しています。さらに神の御座のまわりには 24 の座があつて、そこに 24 人の長老たちがそれぞれ白い衣を着、金の冠をかぶっていました。彼らは位の高い天使たちであると思われます。彼らには特別な務めがあつて、そのための権威と栄誉を授けられていました。しかし、自分たちの座から降りて、中央にある神の御座にむかつてひれ伏し、自分たちの冠をささげ、こう賛美しました。「主よ。われらの神よ。あなたは、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。」（4:11）あらゆる栄誉、栄光を神にお返しし、神のみを聖なるお方、主、またいと高きお方としてあがめる。ここに礼拝の姿があります。

礼拝は「天の窓」と呼ばれます。キリストを信じる者たちには、地上にしながら、礼拝という窓を通して天を見ることが許されています。四つの生き物が歌っている

「聖なる、聖なる、聖なるかな」の賛美は、私たちも地上の礼拝で歌います。私たちの歌う賛美は、天の賛美ととけあって、神のもとに届くのです。私たちは、この天の礼拝を意識しながら神を礼拝することによって、天から、つまり、神の観点からこの世界を見、自分の人生を見、生活を見ることができます。そして、この世界に対する神の計画や自分の人生に対する神のみこころを知るようになるのです。同じビルディングにいても、1階の窓から見える風景と、2階、3階、さらには数10階という高い階から見る風景とではまるで違います。高く上れば上るほど、広い風景を見ることができます。私たちが日曜日の礼拝を繰り返すのも同じです。礼拝を繰り返すごとに、私たちはより高い階に上っていき、より神の観点からものごとを見ることができるようになります。そして、身のまわりに起こる様々なことがらに、いたずらに振り回されることなく、それらのことがらの意味を知り、目的を知って、前進していくのです。

二、小羊イエス（5:1-7）

5章では、「この後、必ず起こる事」が記された巻物が七つの封印で封じられ、その巻物を開くことのできる者も誰もいなかったとあります。栄光に満ちた天に涙はふさわしくないのですが、ヨハネは、せつかく天に引き上げられたのに、神のご計画が封じられてままで示されないことを嘆いて激しく泣きました。しかし、天の長老のひとりが言いました。「泣いてはいけない。見なさい。ユダ族から出たしし、ダビデの根が勝利を得たので、そ

の巻き物を開いて、七つの封印を解くことができます。」（5:5）「ユダ族から出たしし」は創世記 49:9-10 からの言葉です。「ユダは獅子の子。…王権はユダを離れず、統治者の杖はその足の間を離れることはない」とあります。そして「ダビデの根」はイザヤ 11:1 の「エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ」から来ています。どちらも、ユダヤの人たちやキリスト者の間でよく知られている「メシア預言」で、イエス・キリストのことを言っています。

ヨハネが涙の目を拭うと、「小羊」が御座におられる方から巻物を受け取っているのが見えました。この小羊は、もちろん、イエス・キリストです。イエス・キリストは天の長老によって「ユダ族のしし」と呼ばれているのに、その姿は「小羊」です。「しし」、ライオンは「百獣の王」と呼ばれるように、最も強い者を表します。すべてのものの王者であるイエス・キリストが「ライオン」に例えられるのは不思議ではありません。ところが、イエス・キリストは同時に、動物の中で最も弱いもの、「小羊」に例えられています。ライオンにして小羊。この矛盾と思える例えでしか描けないお方、それがイエス・キリストです。

イエス・キリストは神の御子であるのに人となりました。人としても、ダビデ王の子孫として本来なら王宮にお生まれになるはずなのに、家畜小屋で生まれ、飼葉桶に寝かせられました。そしてエルサレムから遠く離れたガリラヤのナザレの村で大工の子として過ごされたの

です。イエスはあらゆる点で、この世では、小羊のように、小さく、弱く、低くなられたのです。そればかりではありません。イエスは「ほふられた小羊」となられました。「ほふられた小羊」とは、神殿で人の罪を背負い、その身代わりとなって、祭壇の上でほふられる小羊のことです。イエスは、私たちの罪を背負い、十字架の上で血を流し、その命を献げてくださいました。それで、イエス・キリストは「小羊」、しかも「ほふられた小羊」と呼ばれているのです。

聖書は、救い主が「ほふられた小羊」となられることを預言していましたが（イザヤ 53 章など）、その預言を成就なさったのはイエス・キリストです。そして救いの預言を成就なさったお方が、「この後、必ず起こる事」、つまり、救いの完成を明らかにすることができるのです。神の手にある巻物の七つの封印の一つひとつは、小羊の血によって溶かされ、神のご計画の扉は十字架の鍵で開かれたと言ってよいでしょう。「ほふられた小羊」イエス・キリストこそ、世界の未来を切り開くお方、私たちの将来を導くお方なのです。

三、小羊への賛美（5:8-14）

5 章の後半には「小羊への賛美」が書かれています。小羊が巻物を受け取ったとき、四つの生き物と長老たちは豎琴と、金の鉢に入った香を携えて小羊の前にひれ伏しました。「豎琴」は賛美を、「香」は祈りを表します。8 節に「この香は聖徒たちの祈りである」と説明されているように、地上の聖徒たちが迫害の中で神を見上げて

祈っている祈りは、天に、神と小羊に届いているのです。古代の礼拝では実際に香を焚いて礼拝しましたが、その煙が高く上っていくのを見て、信仰者たちは、祈りは天に届く、神は祈りに聞いてくださっていることを確信したことでしょう。

天の長老たちはこう賛美しました。「あなたは、巻き物を受け取って、その封印を解くのにふさわしい方です。あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い、私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。」（10）これに加えて、「万の幾万倍、千の幾千倍」という数のみ使いたちの大合唱も起こりました。「ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。」（12節）さらに、「天と地と、地の下と、海の上のあらゆる造られたもの、およびその中にある生き物」、つまり全被造物もまたこう賛美しました。「御座にすわる方と、小羊とに、賛美と誉れと栄光と力が永遠にあるように。」（13節）そして、被造物を代表する四つの生き物が「アーメン」と言って賛美がしめくぐられました（14節）。天のあらゆるものが「小羊」を賛美しています。地上のあらゆる被造物も、「小羊」に栄光をささげています。この「小羊」によって贖われた、神の民また祭司とされた私たちが、子羊に「力、富、知恵、勢い、誉れ、栄光、賛美」を捧げずにはおれないのです。

天使たちは、小羊イエスを賛美し、イエス・キリストの贖いのみわざをほめたたえました。しかし、天使たちは、小羊の贖いそのものを体験することはありません。小羊であるイエスがほふられたのは、人間の罪を赦し、人を罪の束縛から解放するためであって、罪のない天使たちには贖いは必要がないからです。私たちはイエス・キリストの贖いを身を持って体験しているのですから、天使たちに勝って小羊イエスに賛美を捧げることができるはずです。

7章に「十四万四千人」の人々の幻がありましたが、この「十四万四千人」が14章で再び登場して天の長老たちの前で「新しい歌」を歌いますが、その歌について「しかし地上から贖われた十四万四千人のほかには、だれもこの歌を学ぶことができなかった」（14:3）とされています。この「新しい歌」、小羊に捧げる賛美は、子羊の血によって罪の赦しを受け、罪の結果からの癒やしを受けた者だけが歌うことができるからです。天の礼拝には、私たちの、そのような賛美が必要なのです。私たちの罪のためほふられた小羊を、喜びと感謝と愛をもって賛美する、そのような賛美が天に必要です。そのような賛美を天に向かって捧げましょう。天使たちの賛美と共に天の御座に私たちの賛美を捧げましょう。

（祈り）

聖なる、聖なる、聖なる主よ、あなたは、どこまでも聖なる方であるのに、私たち罪ある者をいつくしみ、あなたの御子を「世の罪を取り除く神の小羊」として世に

遣わし、私たちを罪から贖い出してくださいました。小羊イエスをほめたたえながらこの週を過ごし、次の礼拝に、再び天を見上げて集う私たちとしてください。神の小羊、イエス・キリストのお名前で祈ります。

主と共に 黙示録 21:1-4

21:1 また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。

21:2 私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。

21:3 そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、

21:4 彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」

一、新しい天

最近では奇抜な形をした建築物が増えましたが、以前は、ほとんどの建物は *symmetrical*（左右対称）で、そういう建物は見ていて落ち着き、また、美しさを感じさせます。神の造られた多くのものは *symmetrical* だからです。人体もそうで、左右のバランスがとれていると健康だと言われています。

じつは、聖書も *symmetrical* な構造を持っています。聖書は「創世記」から始まり「黙示録」で終わりますが、創世記は天地創造を告げ、黙示録は「新天新地」の到来を語っています（黙示録 21:1）。創世記には神が人の住処として与えてくださった「エデンの園」のことが書かれていますが、黙示録には天の都「新しいエルサレム」

が描かれています（黙示録 21:2）。創世記のエデンの園には川があり、園を潤し、川ぞいに「いのちの木」をはじめとして、さまざまな木があつて実を成らせていました。そこは祝福に満ちた場所でした。ところが、アダムとエバは神と神のことばに従順でなかったため、エデンの園といのちの木の祝福を失いました。けれども、黙示録では、エデンの園の祝福が「新しいエルサレム」で回復されると、約束されています。

天の都にもエデンの園と同じように川があり、いのちの木があります。22:1-2にこう書かれています。「御使いはまた、私に水晶のように光るいのちの水の川を見せた。それは神と小羊との御座から出て、都の大通りの中央を流れていた。川の兩岸には、いのちの木があつて、十二種の実がなり、毎月、実ができた。また、その木の葉は諸国の民をいやした。」続く 22:3 には「もはや、のろわれるものは何もない」とあります。人の罪によって壊された神と人との関係、人と人との関係、そして人と自然との関係のすべてが、天では祝福に変えられ、栄光に輝くものになるのです。

聖書は、この神の救いのみわざを「贖い」という言葉で表しており、この贖いは、イエス・キリストの十字架によって成就、実現されました。

しかし、私たちの霊やたましいは贖われていても、まだ、からだは贖われていません。世界は、これまで秩序が保たれ、自然界も守られてきました。神を信じる人々が世の光、地の塩としての役割を果たしてきたからで

す。ところが、暗闇の力が働き、腐敗が進み、社会の秩序が壊され、自然界もダメージを受けています。ローマ 8:22 に「私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています」とありますが、パンデミックや世界各地での紛争によってまさに世界は、今、うめいています。アメリカでも政治が混乱し、経済が危うくなり、治安が悪化し、皆が不安を感じています。道徳が乱れ、規律がゆるくなっているのに、個人の信仰・信条の自由が制限されるというちぐはぐなことが見られるようになりました。そんな中で、私たちもうめくのですが、それは、絶望のうめきではありません。希望のうめきです。私たちのたましいのうちに始まったキリストの贖いが、私たちのからだにも、世界にも、自然界にももたらされ、それが完成することを待ち望むうめきです。ローマ 8:23 はこう言っています。「そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にしてくださいと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。」このように、すでに贖われ、聖霊をいただいている私たちは、聖霊とともにうめき、贖いの完成を信じて待ち望むのです。

二、天の都

回復されたエデンの園が「エルサレム」と呼ばれているのには、意味があります。エルサレムは、紀元 70 年に神殿もろとも滅ぼされ、黙示録が書かれたころには、荒れ果てたままでした。後に町の名前は「エルサレム」か

ら「アエリア・カピトリナ」と変えられ、エルサレムは、その名も地上から完全に姿を消しました。イエスの十二弟子のほとんどは、エルサレム滅亡以前に殉教しましたが、ヨハネだけは神殿崩壊とエルサレム滅亡を目の当たりにしました。神殿が破壊され、エルサレムが廃墟になることはイエスによって預言されていたとはいえ、それはヨハネやユダヤ人キリスト者には、私たちの想像以上をこえた大きなショックだったと思います。

エルサレム滅亡によって神は、地上には永遠の都がないことを教えられましたが、天の都が「新しいエルサレム」と名付けられることによって、たとえ地上のものが滅び、失われても、天には、それに勝るものが備えられていることを教えてくださったのです。ヘブル 11:16 には「しかし、事実、彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこがれていたのです。それゆえ、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。事実、神は彼らのために都を用意しておられました」とあって、旧約時代の信仰者たちも、目に見える約束の地だけでなく、天の都を目指して信仰の旅をしていたと、聖書は教えています。

人生は「旅」に例えられますが、旅行は帰ってくるところがあるから楽しいのです。ラウンド・トリップのチケットを持っているからこそ安心なのです。帰るところがなかったら、それは悲惨なものになります。ローマによってエルサレムを追われた多くのユダヤの人々は難民となって各地に散っていきました。それは辛く、希望の

ない旅でした。しかし、イエス・キリストを信じていた人々は聖書のことばに従っていちはやくエルサレムから逃れて自分たちの命を救いました。彼らも各地に散らされましたが、「天のエルサレム」の希望があつたので、エルサレムを失ったことにこだわらず、それぞれの土地に定着して生活しました。地上のものだけしか知らない人は、それが奪われたら、絶望しかありません。しかし、天に故郷を持つ人は、どんな時も希望を持って、落ち着いた生活ができるようになるのです。

私たちも自分たちの人生が地上だけのものでない、それは天を目指し、天に続いていくものだということを、しっかりと心に留めましょう。黙示録の預言が人々の信仰の旅を励ましたように、私たちも神のことばによって励まされて、日々の生活を大切にしながら、天を目指す信仰の旅を続けたいと思います。

三、天の神殿

エルサレムの町で最も大切だったのは神殿でした。神殿がそこにあつたからこそ、エルサレムは「聖なる都」と呼ばれたのです。ですから、「新しいエルサレム」も、それが「エルサレム」と呼ばれるからには、どこかに神殿がなければならないのですが、黙示録には天のエルサレムのここに神殿がある、この部分が神殿だとは言われていません。では神殿はないのでしょうか。いいえ、「新しいエルサレム」全体が神殿なのです。3節を見てください。「そのとき私は、御座から出る大きな声がかう言うのを聞いた。『見よ。神の幕屋が人とともにあ

る。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。』」

「神の幕屋」という言葉は、モーセの時代に作られた最初のテントでできた神殿を思い起こさせます。人々は約束の地を目指して旅を続けていた時でしたので、神殿も折りたたんで運ぶことができるテント式のもので「幕屋」と呼ばれました。その後、神殿は恒久的な建物になりそれは「ソロモンの神殿」と呼ばれました。このソロモンの神殿はバビロンによって破壊されましたが、ペルシャの時代に再建されました。ヘロデ王はのちに再建された神殿に黄金を散りばめ豪華なものに改修しました。それで、イエスの時代の神殿は「ヘロデの神殿」と呼ばれました。しかし、神殿が立派になっていくのに反比例して、人々の信仰は貧しくなっていました。そのため、ヘロデの神殿も破壊されてしまったのです。黙示録の神殿がソロモンの神殿でも、ヘロデの神殿でもなく、最初の神殿、「モーセの幕屋」であることには、モーセが神と顔と顔とをあわせて語り合ったような親しい交わりが天で回復することが示唆されています。

続いてこうあります。「また、神ご自身が彼らとともににおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってください。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」（3b-4 節）罪の支払う報酬は「死」であり、「死」は人類最後の敵です。しかし、イエスは私たちの罪の結果である「死」を引き受け、十字架で身代わりとなって死んでくださいました。そして、ご自分の死に

よって死に打ち勝ってくださいました。私たちは、イエス・キリストを信じることによって、イエス・キリストから復活のいのち、永遠のいのちをいただいています。ですから、罪と死の問題は解決されているのですが、しかし、なお、私たちはいつかは世を去らなければなりませんし、また、自分の両親、兄弟、親族、友人、また、信仰の友の死に出会うことでしょう。迫害の時代の教会では、先週は自分の隣に座って一緒に礼拝していた人が殉教し、今週はもう地上にはいないということが日常のようにありました。信仰者たちはその死を悼み、家族を慰めましたが、同時に復活の日に共に集まり、「ハレルヤ、主はよみがえられた」と告白して礼拝を捧げました。それは、私たちの目から涙を拭ってくださる神を信じ、天を見上げていたからでした。神は天の聖徒たちの涙だけでなく、遺された人たちの「涙」をもぬぐい、慰めてくださる。キリスト者たちはそう信じました。

この慰めは、主が私たちの上に幕屋を張って、私たちと共にいてくださることから来ます。「神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられる」とある通りです。「神は彼らとともに住み」という言葉のそもそもの意味は「天幕を張る」です。同じ言葉は、ヨハネ 1:14 の「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた」というところにもあります。キリストが人となって世に来られ、私たちの間に住まわれた、天幕を張ってくださったのは、私たちが、天のエルサレム、天の神殿に住むよ

うになることの保証、その担保です。神が共にいてくださる恵みを前もって体験するためです。

古代の教会の礼拝での挨拶の言葉は「ドミヌス・フォビスクム」でした。「主はあなたと共に」という意味です。英語で “Good Bye” というのも、もともとは “God be with you” です。主は、神殿の主です。主が共にいてくださるところ、そこは神殿になります。たとえ、外には迫害の嵐が吹いていても、礼拝の場は、主が共にいてくださる神殿、主がテントを張って覆い守ってくださる神の幕屋の中です。私たちは、今体験しているこの主の臨在（presence）が、やがて、完全にリアルなものになることを信じ、待ち望んでいます。私たちはこの希望によって支えられています。“The Lord be with you” と、互いに励まし合って、天への旅を共に歩んでいきましょう。

（祈り）

父なる神さま、黙示録の預言の言葉を通して、きょうも、私たちを慰めてくださり感謝します。週ごとに、また日毎に御言葉を聞き、御言葉に親しむことによって、私たちに、御言葉による希望を与えてください。主イエスのお名前です。

はじめて聖書を読む人に、私は「ルカの福音書から読みはじめ、続いて使徒の働きを読んでみてください」とお薦めしています。どちらもルカによってテオピロのために書かれたもので、ルカは、この二つの書物を連続して出版し、連続して読まれることを期待していました。私はこの二冊をおよそ9ヶ月で読むことができる手引きを著しましたので、それを利用していただければと思います。そして、ルカの福音書と使徒の働きを続けて読むことによって、かつてユダヤの地で人々と共に歩まれたイエスが、天に帰られた後も、ご自分の弟子たちと共に働き続けておられ、今も、私たちと共に歩み、私たちの間で働き続けておられることを知っていただきたいと願っています。

聖書の主題はイエス・キリストですから、まず、イエス・キリストのことを知り、それから創世記、出エジプト記など人類のはじまりと神の民のはじまり、また、その救いを学ぶとよいでしょう。そして、聖書の預言がどのようにイエス・キリストによって成就しているかを学ぶなら、聖書がどんなに信頼できるものであるか、またイエスをキリストと信じるのがどんなに理にかなったことであるかが分かるようになります。「預言と成就」を示したチャートなどの教材がありますが、どんな手引きや教材を使うにしても、聖書そのものを読むことがなかったら、いつまで経っても聖書を理解することができないでしょう。



Penguin Club
www.penguinclub.net